伝統的な言語文化の継承と主体的な古典読者の育成
―― 中学校における漢文教育の実践事例をもとに ――

細　田　広　人

1．問題の所在

中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説では，国語科の指導内容は，系統的・段階的に上の学年につながっていくとともに，螺旋的・反復的に繰り返しながら学習し，資質・能力の定着を図ることを基本としている。小学校と高等学校の「間」に位置する中学校においても同様の視点から学習の系統性や連動性を意識した古典教育のあり方について検討する必要があると考える。

特に中学校における漢文教育の場合，これまで「故事成語」,「漢詩」,「論語」という三つの大枠の中で行われ，そこで取り扱われる具体的な学習材も定番のものに偏る傾向にあったと指摘できる。また，漢文の授業に充てる標準学習時間については各教科書会社ともに毎年 3 時間程度となっており，年間を通した授業時数が限られているという課題も見られる。

こうした問題意識のもと，今回は単元学習を軸としたいくつかの実践事例を取り上げながら中学校における漢文教育の学習指導のあり方について，以下のア・イの 2 点から検討を試みた。

ア「伝統的な言語文化の継承」

イ「主体的な古典読者の育成」

2．基本的な考え方

ア「伝統的な言語文化の継承」について

> 「引き続き，我が国の言語文化に親しみ，愛情を持って享受し，その担い手として言語文化を継承・発展させる態度を小・中・高等学校を通じて育成するため，伝統文化に関する学習を重視することが必要である。」（中教審答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」2016 年 12 月より）

継承すべき古典とは何か，その古典を古典たらしめてきたものは何か，中学生が古典を学ぶ意義は何かということを考えていく。その上で学習者の古典への主体的な興味・関心を喚起し，自ら古典に親しみ継承・発展させていこうとする態度の育成を目指す。

イ「主体的な古典読者の育成」について

> 「関係概念」に基づく古典教育は，①学習者の興味・関心，問題意識の喚起，②学習者の実体に基づく価値ある教材の開発・編成，③学習者の主体的活動を行う時間と場の保障，④

学びの協働化，⑤創造的読みと批評，⑥古典を読む力の育成を促し，⑦〈古典〉の内化を求めるところに特色がある。

渡辺（2018）は，上記の①～⑦を提示し，学習者を自ら学びを構成する主体として位置づけ，学習者の対話に基づく創造的な読みによる古典との関係性の構築を重視することで，学習者は，古典を創造的に読み，読みによって立ち上がる〈古典〉を批評し，内化するに至ると述べている。

このことを踏まえると，主体的な古典読者の育成とは，学習者が生涯にわたって自ら古典に親しむ態度を身につけさせるだけでなく，古典との真摯な向き合いや対話によって学習者自らが創造的に読もうとする態度を身につけさせることも重要なのではないかと考えた。

3. 中学校における実践事例の紹介

3-1.「論語」を巡る教材化の可能性を探る実践

単元「論語で国際交流」（6時間）は，中国（湛江市）の中学校との日中交流プログラムとして企図した単元である。これは甲斐（2019）に掲載された中国，台湾，日本の中学生がそれぞれ「論語」の章句を基に書いたエッセイ作品を読み合うことを通して，両国の学習者が気に入った作品やその感想を交流していくというものである。また，学習者自身も同様にエッセイを書く活動を行った[(1)]。今後も甲斐（2019）が述べる東アジアにおける共通の古典である「論語」を用いた読書共同体の形成とその拡張による古典化への参加を促す学習プログラムの開発に向けて実践を重ねていく予定である。

3-2. 学習の系統性を意識した実践

現在，中学校3年間の系統性を意識して実践している単元として「漢文を読み継ぐⅠ～Ⅲ」（以下，単元Ⅰ～Ⅲ）を紹介した。それぞれ「故事成語」，「漢詩」，「論語」を学習材として扱った上で，単元学習の特色を活かした新たな学びの形を提案したものである[(2)]。なお，単元Ⅲはこれから実施する予定のため単元の構想についてのみ紹介した。

単元Ⅰ「ドラマでつなぐ『故事と成語』」（8時間）【第1学年】
単元Ⅱ「漢詩の心象風景を描いて」（8時間）【第2学年】
単元Ⅲ「『論語』を巡るエッセイの交流」（7時間）【第3学年】

3-3. 現代的な視点との総合化を図った実践

現代的な視点との総合化を図った2つの単元について実践紹介を行った。これは単元Ⅰ～Ⅲの学習の系統性や連動性をより学習者に意識させるために設定した古文や「話すこと・聞くこと」と融合した単元開発の事例である。まず，単元「月と古典文学―竹取物語を『物語る』―」（10時間）は，「月」を主題とした「竹取物語」の学習で百人一首と漢詩における「月」の詠まれ方

の違いを考察し，その後，各自のテーマに沿って現代的な視点から「竹取物語」を探究していった実践事例である[3]。次に，単元「『きく』ための『きく』力―あなたの好きな『論語』―」（6時間）は，ゲストティーチャーとして迎えた中国人留学生への質問を軸とした対話活動を行い，その話題の一つとして「論語」を取り入れた実践である[4]。いずれも漢文の知識や内容と関わりをもたせた学習活動を展開することで，単元Ⅰ～Ⅲとの機能的なつながりを意識させるだけでなく，年間における漢文の学習時間そのものの拡充にもつながった。

4. まとめ

今回，漢文教育のあり方の一つとして，ア「伝統的な言語文化の継承」，イ「主体的な古典読者の育成」という２つの視点から実践事例を踏まえた検討を行った。これにより学習者の主体的な興味・関心に根ざすことで総合的・複合的に学ぶ単元学習の特性を活かすことの有用性が見えてきた。また，甲斐（2019）が示した中国，台湾，日本の中学生が読書共同体を形成して古典化への参加を促す学習プログラムの開発から着想を得て単元開発を行うことで，漢文は東アジア漢字文化圏を巻き込んだグローバルな視点からも学習に広がりが生まれる可能性も見えてきた。

今後，漢文教育のあり方を検討する際には，こうした点を踏まえながら，学習者自らが古典と真摯に向き合い対話し，古典を学び，継承する意義は何かを自ら発見していくような主体的な古典読者の育成が必要なのではないかと考えた。

注

（１） これは前任校の公立中高一貫校で甲斐（2019）の研究を追試的に行った実践である。しかしながら，新型コロナウイルスの感染拡大に伴い，予定していた来日および日中交流プログラムは急遽中止となった。そのため単元の内容を一部変更して行ったものを紹介した。

（２） 実践内容の詳細については，以下の各稿を参照。
五味貴久子・秋田哲郎・細田広人・佐々木岳（2021）「新学習指導要領の施行を見据えた国語科授業実践（3）」『研究紀要』第73号，筑波大学附属中学校研究部，pp.2-11.
細田広人（2022）「『問いを立てて考える力』を育てる」『研究紀要』第74号，筑波大学附属中学校研究部，pp.39-58.

（３） 細田広人（2021）「中学校における古文・漢文と現代視点との総合化による『竹取物語』の授業」人文科教育学会『人文科教育研究』第48号，pp.265-278.

（４） 細田広人・秋田哲郎（2021）「中学校の学習評価プラン 実践的な言語活動の中で学習者の学びを評価する―『質問する力をつける』（中２）―」『教育科学 国語教育』７月号，明治図書，pp.56-59.

参考文献

甲斐雄一郎（2019）『中国大陸，台湾，日本 中学生が読んだ論語（國中生讀論語）』（第二版），筑

波大学人間系教育学域
渡辺春美（2018）『「関係概念」に基づく古典教育の研究―古典教育活性化のための基礎論として―』，溪水社，pp.233-245, 299-305.

（筑波大学附属中学校）